

高齢化で新ビジネス

高齢化の進展による紙おむつ市場の需要を商機にしようという取り組みが始まっている。新興企業は、病院や介護施設で毎日大量に出る使用済みおむつを固形燃料に変身させて再利用。一方、日用品大手は大人向け需要の拡大に対応し、工場の増設や品種多さを拡充している。

病院、介護施設で再利用

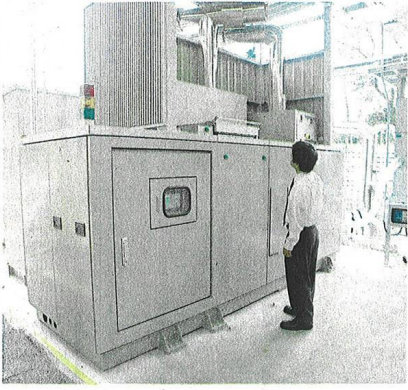
施設などから出る使用済みの紙おむつを大半は、業者が焼却処分している。スーパー・フェイズが開発した「紙おむつ処理装置」で、使用済みおむつから変身した固形燃料



スーパー・フェイズが開発した「紙おむつ処理装置」で、使用済みおむつから変身した固形燃料

のはスーパー・フェイズ(東京)。特殊な装置でおむつを破砕して乾燥、殺菌処理などを行った上で、丸1日かけて再生燃料にする。東京都町田市の病院がこの装置を敷地内に設置。冬場の燃料代がか

スーパー・フェイズが東京都町田市の病院に設置した「紙おむつ処理装置」



紙おむつが燃料に

紙おむつの国内生産枚数



さむ北海道の自治体などが導入に前向きという。

大手 大人向け需要拡大に対応

メーカーは、大人向け事業を強化している。業界首位のユニ・チャームは、性能を向上させた新製品を相次いで投入。肌触りなどを改善したり、簡単に交換できるようにするなど工夫した。大王製紙は米アロクター・アンド・ギャンブル(P&G)から、日本での大人用紙おむつ事業を買収。静岡県富士宮市に新工場を建設し、生産能力を高めている。日本衛生材料工業連合会によると、2009年の紙おむつの国内向け生産枚数は前年比1・4%増の128億1300万枚。大人用が6・9%増の50億900万枚と初めて50億枚を突破し、乳幼児用は1・9%減だった。

北國新聞
平成22年3月25日